

自画像なのかを想像すると楽しい。

到着はあと十分と告げられて急に時間が濃くなっていく  
田中和美

たとえば、東京から十二時間ほど飛行機に乗ってパリまで行くと仮定してみよう。あと十分でパリ、そう考えると時間が濃くなってゆく感覚が実感できる。表現としては、「急に」がポイントだろう。

花時計はゆったり回り短針はしばらく紫パンジーのうえ  
小寺豊子

短針だから、しばらくと言っても、一時間近くは紫パンジーの上にあるはずだ。花時計だって、大きさはちがうが、ふつうの時計と同じく短針は一時間に目盛り一つしか動かない。ベンチにでも座って、ゆったりとした時間をすごしているのだろう。

一斉にあまたの腕は動きたり半袖多きヴァイオリンパート  
梅原ひろみ

高関健のコンサートに取材した一連の作。半袖の女性奏者が多いので、ヴァイオリンの弓を弾くときの腕が目立つのだろう。映像が不思議な一首なので、目についた。

雀とは違うテンポの会話だな小枝飛び交う四十雀たち  
三宅徹夫

一羽ずつだと気づかないけれども、何羽が集まるとその鳥の種としての個性が見えてくる、というのだ。雀と四十雀。擬人化して、それぞれの群れの鳴き声を「会話」と表現したところが見どころ。

前脚のさらに輝く旅人に世界のハチ公触れられを

ば  
北澤道子

「前脚のさらに輝く」で切れる二句切れの作。渋谷駅前ハチ公像が、世界各国から来る多くの旅人たちにさわられて、前足の部分がさらに輝いているというのだ。すでににも多くの人たちの手でさわられて輝いていることを示す「さらに」が可笑しい。一首にユーモアを読んでは、いい、と思う。

心をば癒すもの主義に何もなし沁みて宗教に勝てぬと思ひき  
坂口弘

イデオロギーと宗教の関係である。近代以後、世界の多くの長編小説であつかわれてきた大問題を、作者なりに思い切って見通しをたてた力わざ。作者名と共に読むとき、多くを考えさせられる。

送られる風が命の怪獣の爪やはらかに人を迎へる  
鷺沼あかね

「送られる風が命の怪獣」は、やや分かりにくいだが、送風で形を保っている風船状の大きな怪獣なのだろう。結句を考えあわせると、遊園地の入口などをイメージすればいいのだろう。短歌にしにくい題材を、あえてうたった試みに注目した。

小紋潤燃え尽きるまで斎場でかつばえびせんつまみに飲めり  
谷岡亜紀

今月の八首は長崎の浦上天主堂で行われた小紋潤の葬儀に関する作。ここは火葬される間の待ち時間だが、あえて「かつばえびせん」という軽い感じの題材をだすことで、日常との距離の意外な近さを表現しているようだ。